

ことばのうみ

kotoba-no-umi



触読のすすめ

佐伯 一麦

ツン読、速読、立ち読み、黙読など、本の読み方は数多あるが、その中には、触読というものもある、と私は思っている。図書館で書棚の前に立つと、私は、おもむろに挨拶を交わすようにして本に触れていく。

それは、十八の頃書店で働いていた習い性のようなものかもしれない。いまでも、知らず知らずのうちに書架の本の背を揃えたりしている自分に気がつく。けれども、そうやっていて、はじめて存在に気付き、ふとページを開いてみる気になる本もあるものだ。挿画の微妙な色合い、装幀の感じ、活字のちがひ、紙の色、それから紙やインクのかすかなにおい、手触り、重み、それらは実際に手に取って触ってみなければ味わえない。

新しい本の糊の効いたワイシャツのような新鮮さもよいが、分厚い古典全集が少しずつ色褪せていくのを見つめ続けるのもよいものだ。学校帰り、勤め帰りに図書館に立ち寄る人々に、本は、明日も働こう、という静かな熱を与えてくれているようだ。

(さえき・かずみ 作家)

